

幼児向け演奏会のプログラムに対する一考察

— 『おやこ音楽会』の開催をもとに—

白石 朝子

A Study on Concert Programs for Infants Based on the Hosting of “The Parents and Children Concert”

Asako SHIRAISHI

1. はじめに

近年、子どもを対象とした演奏会は、個人の演奏家や音楽団体によって全国各地で開催されるようになった。社会的にも『文化芸術による子供の育成事業』といった文化庁による事業¹⁾をはじめ、一般社団法人『地域創造』²⁾に代表されるように各教育機関や施設などで「アウトリーチ活動」が盛んに行われ、子どもたちが音楽に親しむ機会を増やそうという動きが活発になっている。これらの活動には0歳児も入場可能とした幅広い年齢層を対象とした演奏会³⁾もみられるが、小学生もしくは中学生を対象とした公演が多く⁴⁾、幼児を対象とした演奏会については、まだ不足しているのが現状ではないだろうか。

その一方で幼児が音楽に親しむことの重要性は言うまでもなく⁵⁾、これまで音楽と科学のコラボレーションによる訪問演奏会(豊田ら:2014)やクラシック音楽が未就学児に与える影響の考察(戸川:2013)、クラシック・ピアノ演奏による幼児教育の可能性を探る研究(澤田:2006)など、様々な視点から幼児を対象とした演奏プログラムの研究が行われつつある。

著者は、この現状に鑑みて『ファゴットとピアノで贈るおやこ音楽会』を2014年の夏から季節毎に年4回開催してきた。音楽会では各々の季節を感じるテーマに沿って、クラシック曲や童謡など様々な分野の曲目を演奏した。ファゴット奏者の田邊武士氏⁶⁾と著者(ピアニスト)で始めた音楽会は、2015年春より打楽器奏者の林美春氏⁷⁾を迎えて『ファゴットとピアノと打楽器で贈るおやこ音楽会』となり、これまで計5回(2014年夏・秋・冬・2015年春・夏)の公演を行った⁸⁾。音楽会では、『耳で聴くだけでなく目で見て、肌で感じて、体全部で音楽を体験する』⁹⁾ことを念頭に、内容を構成した。

本論では、これらの音楽会での取り組みについて報告するとともに、音楽会を1)選曲・構成、2)既存曲の新たな聴かせ方、3)語りかけの重視という3つの視点によって分析し、語りかけや演奏曲目に対する子どもたちの反響、また様々な音の違いに反応した子どもたちの様子を精査・検証することで、幼児向け演奏会のプログラムに関する考察を行うことを目的とした。

2. 『おやこ音楽会』開催概要

音楽会は、第1回(2014年7月6日)、第2回(2014年9月21日)、第3回(2014年12月7日)

ではファゴットとピアノの編成で行い、第4回(2015年3月15日)、第5回(2015年7月12日)では、それに打楽器を加えた編成で企画した。会場は定員50名の音楽サロン『スタジオ・リリタ』(名古屋市西区)¹⁰⁾である。第1回から第3回は午前・午後の2公演、第4回、第5回は午前2回・午後1回の3公演を行った。1公演は約1時間の内容で、話を交えながらあらゆるジャンルの音楽を演奏した。

(1) 環境設定

本公演の会場は舞台と客席との段差がほとんどなく、子どもたちでも簡単に舞台へ上ることが出来るほど距離が近い。舞台にはグランド・ピアノ(スタンウェイM-170)があり、会場はクラシック・コンサートに対応できるように設計してあるため、音響は申し分ない。通常椅子は50席並べてあるが、本公演のときは壁側の15席ほどを設置して残りの椅子は撤去した。その理由は子どもたちが自由に踊ったり跳ねたりできる空間であると同時に、新しい環境に緊張している子どもがいれば保護者の膝の上に座って安心して楽しんでもらえるためである。その一方で妊婦やお年寄りなどが椅子に座ることができるよう配慮した。

本公演では、演奏者が本番前から子どもたちと関わるようにしている。来場した保護者や子どもたちと挨拶をして話をすることで、演奏者に対して親近感をもってもらい安心して音楽会を楽しんでもらうためである。演奏者にとっても子どもたちと親しむことにより音楽会での語りかけが行いやすくなり、相互的に良い関係を築く事が期待されるであろう。

(2) 構成と選曲

ここでは本公演の構成や選曲について述べていきたい。豊田ほか(2013)は、鑑賞指導研究グループ“カンパネラ”として幼児を対象とした訪問演奏会を行い、演奏会の構成について考慮すべきこととして以下の6点を挙げている。¹¹⁾

- ① 園児参加型演目の導入及び園児にとっての既知曲の採用
- ② 鑑賞対象として望ましい曲の選択
- ③ 鑑賞時間の適正への配慮
- ④ 造形的表現内容と身体的表現内容の導入
- ⑤ 演劇的なアプローチの導入及び演者と園児間での言葉による暖かい交流・コミュニケーションの成立を配慮
- ⑥ 色彩、造形的にも内容豊かな舞台の創造

本公演では①に対応して、幼児だけでなく保護者も口ずさむことが出来る曲、また《おおまき場はみどり》や《北風小僧の寒太郎》のように曲間で呼び声をかける曲を取り入れた。また②としては、「園児が興味を持ち、集中して聴くことが出来るテンポが速い曲、テンポ、ダイナミック、音色などのファクターの大きい音楽や音声」¹²⁾を選択するだけでなく、それぞれの楽器奏法による様々な音や音楽の表現を用いて、既存曲の新たな魅力づくりにも取り組んだ。そのほか③に対応して2分から3分程度の曲を中心に選曲及び編曲をし、④として紙芝居や手遊びなどを用いるだけでなく、毎回子どもたちが立ち上がって音楽に合わせて体を動かせる曲を取り入れた。また⑤として曲間に「語りかけ」を行うことを重要視してプログラムを構成したほか、⑥に対応して舞台に季節を感じられるような飾り付けを行ったうえ¹³⁾、照明によって舞台

を演出した。

本公演は季節毎に行っていることから、特に子どもたちには音楽会を通して季節を感じてほしいという思いを込めた。幼稚園指導要領の「環境」にもあるように「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力」を養うために「季節により自然や人間の生活に変化のあることに気づく」こと、それについて音楽を聴いて親子で情景を思い描くことを期待している。

公演に向けて出演者で話し合いを行い、それぞれの季節を題材としたテーマを以下のように設定し、思い描かれるキーワードから選曲してプログラムを構成した。

- 2014年 夏 『暑い夏、楽しい夏』 … 「海」「お祭り」「七夕」
- 2014年 秋 『ピクニック、実りの秋』 … 「行楽」「豊作」
- 2014年 冬 『寒い冬、クリスマス』 … 「雪」「サンタクロース」
- 2015年 春 『動植物の目覚め』 … 「冬眠からの目覚め」「開花」
- 2015年 夏 『森への冒険』 … 「緑」「おばけ」

演奏者は全員プロのクラシック音楽家としても活動する者であるが、本公演ではクラシック音楽だけでなく、様々な分野の音楽を取り入れた。芸術的な価値の高いクラシック音楽をいかに幼児に聴かせるかということも興味深い研究の一つである（澤田：2006、戸川：2013）が、本公演では西洋の音楽か日本の音楽か、またクラシック・ジャズ・ポップスは問わず、讃美歌などの教会音楽、ラテン音楽や民族音楽もしくはわらべ歌、童謡といった子どもの歌などあらゆる分野の音楽の魅力を引き出すことに努めた。

表1 2014年夏のおやこ音楽会・プログラム

	演奏曲目	分類	楽器編成
1	アメリカ民謡《線路は続くよどこまでも》	A	Fg. P
2	楽器のお話	C・E	Fg. P
3	井上武士《海》	B	Fg. P
4	J.ベン《マシュ・ケ・ナダ》	D	Fg. P
5	峯陽《おばけなんてないさ》	B	Fg. P
6	《げんこつやまのためきさん》	B	Fg. P
7	A. ピアソラ《リベルタンゴ》	D	Fg. P
8	C.ドビュッシー《アラベスク第1番》	C	P
9	A.モーツァルト《きらきら星変奏曲》	C	Fg. P
10	下総皖一《たなはたさま》	B	Fg. P
11	いずみたく《手のひらを太陽に》	B	Fg. P

表2 2014年秋のおやこ音楽会・プログラム

	演奏曲目	分類	楽器編成
1	服部隆之《青空しんこきゅう》	E	Fg. P
2	楽器のお話	C・E	Fg. P
3	イギリス民謡《ピクニック》	A	Fg. P
4	中田喜直《ちいさい秋見つけた》	B	Fg. P
5	C.ドビュッシー《ゴリウオーグのケーキウォーク》	C	P
6	團伊玖磨《ぞうさん》	B	Fg. P
7	イギリス民謡《大きな栗の木の下で》	A	Fg. P
8	ドイツ民謡《山の音楽家》	A	Fg. P
9	《大きな古時計》	B	Fg. P
10	アメリカ民謡《線路は続くよどこまでも》	A	Fg. P

各公演で演奏したプログラムは、表1～表5の通りである。曲目は、A) 世界の民謡、B) 童謡・唱歌、C) クラシック音楽、D) 軽音楽、ラテン音楽、映画音楽、讃美歌など外国の曲、E) テレビ・ソング、ポップスなど日本の曲に分類し、楽器編成はFg. (ファゴット)、P. (ピアノ) Per. (打楽器) で表記した。分類した曲目を集計したものが表6である。冬のおやこ音楽会(表3) 以外では全分野の作品を網羅しており、表6の集計からは、全分野の作品を大きな偏りはなく演奏されていることがわかる。

プログラムの曲目は、ピアノ・ソロの作品(楽器編成P) 以外は、2分から3分程度の短い曲(田邊氏による編曲) であり、10曲から15曲で構成した。毎回最初に心地よくて華やかな曲を演奏し、次

に自己紹介と楽器紹介として、それぞれの出演者が演奏を交えて話をした。そのあと季節にち

表3 2014年冬のおやこ音楽会・プログラム

	演奏曲目	分類	楽器編成
1	G.F.ヘンデル《もろびとこぞりて》	C	Fg. P
2	楽器のお話	C・E	Fg. P
3	《北風小僧の寒太郎》	B	Fg. P
4	《雪》	B	Fg. P
5	L.アンダーソン《タイプライター》	D	Fg. P
6	ドゥビエヌ《ソナタ 第3番》	C	Fg. P
7	J.F.クーツ《サンタが街にやってくる》	D	Fg. P
8	田邊武士《あわてんぼうのサンタクロース》※1	Fg. P	
9	《きよしこの夜》	D	Fg. P
10	《ひいらぎ飾ろう》	D	Fg. P
11	L.アンダーソン《そりすべり》	D	Fg. P
12	《ジングルベル》	D	Fg. P

※1 オリジナル作品

表4 2015年春のおやこ音楽会・プログラム

	演奏曲目	分類	楽器編成
1	L.アンダーソン《トランペット吹きの日》	D	Fg. P Per.
2	楽器のお話	C・E	Fg. P Per.
3	《春が来た》	B	Fg. P Per.
4	L.アンダーソン《シンクベアテッド・クロック》	D	Fg. P Per.
5	《おつかいありさん》	B	Fg. P Per.
6	F.ショパン《小犬のワルツ》	C	P.
7	A. ピアソラ《フェロスアイレスの春》	D	Fg. P
8	《かえるの合唱》	B	Fg. P Per.
9	《君の瞳に恋してる》	D	Fg. P Per.
10	P.チャイコフスキー《花のワルツ》	C	Fg. P Per.
11	イギリス民謡《ピクニック》	A	Fg. P Per.

表5 2015年夏のおやこ音楽会・プログラム

	演奏曲目	分類	楽器編成
1	バッハ《ピアノ協奏曲 第3番》より第1楽章	C	Fg. P Per.
2	楽器のお話	C・E	Fg. P Per.
3	《茶摘み》	B	Fg. P Per.
4	L. アンダーソン《Plink, Plank, Plunk》	D	Fg. P Per.
5	G.ガーシュウィン《サマータイム》	C	P Per.
6	アメリカ民謡《もりのくまさん》	A	Fg. P Per.
7	《かたつむり》※2	B	Fg. P Per.
8	A. ピアソラ《鮫》	D	Fg. P
9	峯陽《おぼけなんてないさ》	B	Fg. P Per.
10	チャイコフスキー《金平糖の踊り》	C	Fg. P Per.
11	下総院《たなばたさま》	B	Fg. P Per.
12	M.ヴァーレ《バトゥカーダ》	D	Fg. P Per.
13	チェコ民謡《おお牧場はみどり》	A	Fg. P Per.

※2 ピアノではなくピアノカを使用

表6 おやこ音楽会 (5公演) の演奏曲

表記	分類	曲数
A	世界の民謡	8
B	童謡・唱歌	17
C	クラシック音楽	15
D	軽音楽・ラテン音楽・映画音楽・讃美歌など外国の曲	15
E	テレビ・ソング、ポップスなど日本の曲	6
	合計	61

表7 参加型プログラムの曲目と内容

公演	曲目	内容
2014夏	《マシュ・ケ・ナダ》	手作りのマラカスでリズムに合わせて身体遊び
2014夏	《げんこつやまのたぬきさん》	手遊び
2014秋	《大きな栗の木の下で》	歌いながら身体遊び
2014秋	《山の音楽家》	舞台上で打楽器を使って一緒に演奏
2014冬	《そりすべり》	手作りの鈴で演奏
2015春	《君の瞳に恋してる》	ボディー・パーカッション
2015春	《花のワルツ》	手作りのカスタネットでワルツに合わせて演奏
2015夏	《バトゥカーダ》	手作りのマラカスでリズムに合わせて身体遊び

なんだ話題を1曲毎に提供しながら演奏した。プログラムの後半では、手遊び歌やボディーパーカッションのほか、手作りの楽器を配り、体全体で音楽を感じて演奏に参加してもらう曲目を取り入れた(表7)。

またプログラムの曲目の中には1曲全体を通して演奏するのではなく、区分によって話や音を取り入れたものもある。例えば表1の《きらきら星変奏曲》では、七夕にまつわる「織姫と彦星の物語」を話しながら12の変奏曲を分けて効果的に使用し、表2の《大きな古時計》では実際に数十年前の振り子時計を用いて、ぜんまいを巻く音や時計の鳴る音を音楽に取り入れた。また表3の《タイプライター》では、実際に年代物のタイプライターを用意し、キーを打つ音をリズムカルに表現してピアノと合わせた。また《あわてんぼうのサンタクロース》は、音楽紙芝居として出演者が演技をしながら演奏した。

幼児向けの音楽では、「どのような曲を演奏するか」という選曲方法について考察が進められているが(石井:2003、澤田:2006)、それに加えて曲を「どのように演奏するのか」また「何を表現するのか」を念頭に置くことは大変重要であるといえる。そのために音の表現は大事な要素であり、2015年春(表4)から打楽器奏者に加え、様々な種類の音の表現を取り入れられるようになったことは大きな変化であった。これについては『3. 既存曲の聴かせ方への工夫』で詳しく述べることにする。

(3) 楽器紹介

本公演では必ず楽器について話す時間（表1―表5『楽器のお話』）を設けた。特に生演奏を間近で聴くという経験だけでなく、通常の演奏とは違った特別な体験をしてもらうことにより楽器に親しみをもってもらうことを大切にしたい。ピアノでは蓋の中を覗いてみることやピアノの下に入って音を聴いてみることを、またファゴットでは部品ごとの分解と組み立てにより楽器の構造を知ること、打楽器では楽器に触れる道具の変化により1つの楽器から何種類もの音が出ることを示すようプログラムに組み込んだ。ここでは、それに対する子どもの反応を検証しながら詳細を報告する。

① ピアノ

ピアノは保育園や幼稚園の多くに設置されていることから、馴染みのある楽器といえるであろう。しかしアップライト・ピアノやオルガンとは大きさも響きも違う、グランド・ピアノを間近で見たり聴いたりする機会はあまりないのではないだろうか。本公演では、簡単なピアノ紹介1) 単音の小さい音から和音の大きな音、2) 一番低い音からグリッサンドで88鍵をかけ上がり一番高い音を弾いた後、ピアノのすぐ近くまで来てもらい、演奏している様子や楽器が鳴る様子を見ることや、さらにはピアノの下に潜って音を聴くことを提案した。演奏者は比較的短い作品（約4分）且つ流麗で美しい作品である、F. ショパン《即興曲 第1番》もしくはM. ラヴェル《クーブランの墓》より〈プレリュード〉を演奏した。その間子どもたちは演奏者の指を見たりピアノの下に入って音を聴いたり、保護者に抱っこしてもらって蓋の中をのぞいたり、ダンパーが上がる様子を眺めたりしている。またペダルに興味を示して足元をじっと見ている子どももいた。演奏後、子どもたちに感想を尋ねると、口々に「ゆびがとてもはやくうごいていてびっくりした。」「じょうずだった。」「おとがきれいだった。」「なかでうごいていたものがおもしろかった。」「ピアノのしたはおとがいつもよりおおききこえた。」と答えていた。

② ファゴット

ファゴットは子どもたちにとって、またもしかしたら保護者にとってもあまり馴染みのない楽器といえるかもしれない。材質や構造などについて、子どもたちに分かりやすい例えを用いながら説明した後、リードを外し、「これだけでも音が出ますよ。どれだけ美しい音が出るか聞いてみてね」と伝えてリードのみで音を出した。子どもたちは、美しい音を期待して耳をそばだてるが、実際にはその音が美しい音というよりも蚊の飛ぶ音や蛙の鳴き声（ファゴット奏者が口に手を当てながらリードを鳴らして表現した音）に聞こえるため、保護者と顔を見合わせ、笑いながら喜んで話を聞いていた。そのあと《ピタゴラススイッチ》のピアノ演奏に合わせて、ファゴット奏者が楽器の分解をはじめると、子どもたちは「ピタゴラススイッチだ。」と嬉しそうな表情をみせた。そしてファゴットがバラバラになっていく過程を見て驚き、なかには心配そうな顔をする子どももいた。また、ピアノの演奏がどんどん先に進んでしまうため子供たちは「はやくはやく」と声をかけながら、元の楽器に戻るのかとハラハラした様子で眺めている。そして元の状態に戻って、《ピタゴラススイッチ》の最後のフレーズを演奏すると、拍手と歓声が起こった。好奇心旺盛な子どもたちにとって、楽器の分解と組み立ては興味深いことであり、食い入るように見ている子どもの姿が印象的であった。

③ 打楽器

子どもにとって家の中のあらゆるものが打楽器になり得るという意味では、打楽器は、いちばん身近な楽器といえるかもしれない。奏者が、打楽器の奏法について叩いたり、こすったり、振ったりして色々な音を出すことを伝えた後、E. ノヴォトニー《A Minute of News》を演奏した。演奏では、手やスティック、マレット、ブラシなど様々な道具によってスネアドラムが鳴らされ、子どもたちは次々に変化する音を楽しんでいた。なかには、あまりの大きな音に驚いて泣いてしまう子どももいたが、揺れ動くリズムに刺激を受けて、頭を動かしたり手を叩いてリズムをとりながら聴く子ども、体を大きく揺らしながら聴く子ども、太鼓を叩く真似をする子ども、とび跳ねながら聴く子どもなど、それぞれに迫力のある演奏に引き込まれている様子であった。一つの楽器から何種類もの音やリズムを生み出す専門家の技術、豊かな奏法による演奏を体験することは、子どもたちはもちろんのこと、保護者にとっても特別な経験だといえるだろう。

3. 既存曲の聴かせ方への工夫

(1) 音の想像

幼児に親しまれている童謡や唱歌などには、自然や生き物を題材とした作品が多く存在する。本公演でも前述したとおりこれらの楽曲を演奏しているが、その際には音の表現を行うことで、子どもたちに既存曲の新たな魅力を伝えられるよう心がけた。これまでの音楽会で表現した音と使用楽器は表8の通りである。

表8 表現した音と使用楽器

公演	曲目	表現した音	使用楽器
2014夏	《海》	波の音	手作り楽器※1
2014夏	《おばけなんてないさ》	おばけの出る音	ピアノ
2014夏	《リベルタンゴ》	嵐・風の音	ピアノ
2014秋	《ピクニック》	やぎ、アヒル、牛の鳴き声	声
2014秋	《大きな古時計》	時計の鳴る音	時計
2014秋	《線路は続くよどこまでも》	汽笛の音	ファゴット、ピアノ
2014冬	《雪》	雪の降る音	グロッケン
2014冬	《サンタが街にやってくる》	サンタがそりに乗る音	鈴
2015春	《春が来た》	芽が出る音、花が咲く音	ウッドブロック、ウインドチャイム
2015春	《おつかいありさん》	ありのぶつかる音	カホン、ボンゴ
2015春	《かえるの合唱》	カエルの鳴き声	ギロ、手作り楽器 ※2
2015夏	《Plink, Plank, Plunk》	とうもろこしのはじける音	風船
2015夏	《かたつむり》	かたつむりの動く音	ギロ
2015夏	《たなばたさま》	星の輝く音	ウインドチャイム、トライアングル
2015夏	《おばけなんてないさ》	からかさおばけの歩く音	木の板。ウッドブロック

※1 箱に砂を入れたもの

※2 紙コップとストローで出来た楽器

これらの音は、生活の中で実際に体験できる音（例えば波の音、動物の鳴き声、汽笛の音）と想像上の音（例えば芽が出る音、花が咲く音、ありのぶつかる音）に分けられる。本公演で特に重視した音は、後者の方であった。例えば2015年春に演奏した《おつかいありさん》では、「ありのぶつかる音はどんな音だろう。」と語りかけながら音楽を奏で、1) 通常の演奏、2)

小さな音、3)大きな音を順番に出し、子どもたちにありのぶつかる音を想像してもらうように試みた。子どもたちは、コツンという小さな音に耳を澄ましたり笑ったりし、低くてよく響く大きな音におどろいて、保護者と一緒に「ありさんが頭をぶつけちゃったね。」「ありさんが転んじゃったかな。」と話す様子が見られた。また2015年夏で演奏した《かたつむり》では、予め《かたつむり》を演奏することは伝えず、茂みの中からカサカサする音(かたつむりが動く音をイメージして表現)を聞かせ、「茂みの中に何か隠れているよ。」と伝えてから、《かたつむり》を演奏した。聴き馴染みのある《かたつむり》の音楽に気付いた子どもたちが「かたつむりだ。」と口々に言う姿がみられた。

これらの取り組みによって、音の表現を作品の演奏前に取り入れることで、作品鑑賞への導入を促して作品に対するイメージを膨らませるとともに、作品の演奏中に音を挿入することで、作品をより想像力豊かに聴くよう働きかけることができたのではないだろうか。また風の音と一言で言っても心地良いそよ風、台風のような嵐の風、木枯らし、寒い北風と、季節によって音の表現は違い、その時に聴く風の音が日々の生活の中で聞こえる音と相応し、より印象深く聴こえることを意識して演奏した。子どもたち、またその保護者が音楽会での経験をきっかけとして自然界の繊細な音に耳を傾け、様々な音に気付くことで子どもたちの表現方法へとつながっていくことを期待した。

(2)「物語性」のある音楽

本公演では音による工夫だけでなく、既存の音楽作品の起承転結により、その転換部分で話を発展させて、物語のように聴かせる工夫を行った。

例えば2015年夏の音楽会では、L. アンダーソン《Plink, Plank, Plunk》を「とうもろこしくんの冒険」と称して演奏した。まず、あらかじめ用意した「とうもろこしくん(とうもろこしに目や鼻をつけて手を刺しておく)を子どもたちに紹介する。とうもろこしの手は、先に黄色いピンポン球を付けた打楽器のマレットになっており、これを使用して演奏をした。まず打楽器奏者が「今からとうもろこしくんが旅に出発します」と伝え、ウッドブロックなどの打楽器の上をマレット(とうもろこしくん)が飛び跳ねて旅をしているように見せ、曲を演奏する。中間部では、ティンパニをスーパーボールでこすることにより、お腹がへって鳴る音を表現した。そして打楽器奏者がフライパンを取り出し、「火にかけると、あるものに変身します。それにはみんなの拍手が必要です。みんなの拍手で、このとうもろこしくんを変身させてください。」と声をかけ、子どもたちと保護者らに拍手をしてもらった。最初は疎らだった拍手がだんだん大きくなり最高潮に達したところで、ファゴット奏者が風船を割って、ポップコーンのはじける音を表現した。打楽器奏者がフライパンからポップコーンに見たてた白いマレットを取り出し、「ポップコーンに変身しました。ポップコーンくんが旅に出ます。」と言って、マレット(ポップコーンくん)を使用して後半を演奏した。そして最後にお皿ののったポップコーンを差し出した。子どもたちは、最後まで飽きることなく、作品を楽しんでいた。

このように物語に音楽をつけるのではなく、起承転結を含んでいる音楽の構成を読み取り、それを生かして物語を生み出すことによって作品の新たな魅力を引き出した。この取り組みも、既存曲を楽しく聴かせる手法の一つといえるだろう。この演出によって、子どもたちが表現することの楽しさや面白さを感じ取り、音や音楽に興味深く見入ることを目指した。

4. 「語りかけ」の重視

(1) 「語りかけ」の役割

本公演では、前述のように演奏曲毎に「語りかけ」を行った。「語りかけ」では、曲目の内容や構成について話をするのではなく、「語りかけ」によって曲目への導入を行い、絵本を読み進めているかのような体験、イメージを浮かべながら演奏を聴いてもらえるように心掛けた。例えば2015年春のおやこ音楽会では、表9のような「語りかけ」を行った。

表9 2015年春のおやこ音楽会 ねらいと語りかけ内容

	ねらい	演奏曲目	語りかけ
1	オープニング:演奏会への導入	《トランペット吹きの休日》	おやこ音楽会へようこそ。今日は、春らしい色んな音楽を演奏します。知っている曲があったら一緒に歌ってもいいですよ、知らない曲でも身体が動いたら一緒に踊ってもいいです。《中略》皆さんの好きなように音楽を楽しんでください。
2	演奏者紹介・楽器への親しみ	楽器のお話	楽器はどんな音がするかな? ※1
3	春の匂いを想像しながら歌う	《春が来た》	最近暖かくなってきたね。みんなはお散歩をするかな? 最近ちょっとずつ暖かくなってきて、すぐそこまで春がやってきているみたいですね。春に野原とか森の中を歩いていると冬とは違う匂いがするんだけど、みんなは春の匂いをかいだことがあるかな?
4	打楽器のリズムを楽しむ ※2	《シンコペーテッド・クロック》	木の実から芽がポコポコって出てきたり、冬の間眠っていた木から若葉がポンと目を覚ます音が聞こえてきたね。春になるといろんな生き物が目を覚ますよ。野原や森の中にはこんな目覚まし時計があるかもしれません。
5	ありがぶつかる音の表現を聴く	《おつかいありさん》	土の中からありさんも出てきますね。ありさんをよく見たことはありますか? ありがぶつかる音はどんな音かな?
6	傾聴① 春を喜ぶ犬を想像しながら	《小犬のワルツ》	春になると、いろんな動物が目覚まして、歌ったり踊ったりしています。ワンちゃんは、寒い寒い冬も好きだけれど、ほかほか暖かい春も大好きで公園を走り回っています。
7	傾聴② 洗みを想像しながら	《ブエノスアイレスの春》	ワンちゃん楽しそうだったね。みんなは“つくし”って知っていますか。それじゃあ“ふきのとう”は?“菜の花”は? つくしも菜の花も春の野原に出できます。春は良く雨が降るんだけど、雨が降った後にニョキニョキって生えてきます。そして“つくし”も“ふきのとう”も“菜の花”もたべるとちょっと苦いです。みんなは食べられるかな、大人の味です。
8	色々な蛙の鳴き声を聴く	《かえるの合唱》	この前公園の池の中に黒くてこんなに小さいものが泳いでいました。ありさんじゃないよ。何だかわかるかな。そうです、おたまじゃくしです。おたまじゃくしは大きくなると何になるか知っていますか?
9	ボディーパーカッションに挑戦する	《君の瞳に恋してる》	いろんな蛙がいたね。ずっと座って聴いていたからそろそろ身体をうごかしたくなかったかな? お姉さんと体を動かしたい人? はい、ではみんな立ってお姉さんの前をしてみてください。
10	ワルツに乗って一緒に演奏する	《花のワルツ》	みんなとっても上手だったね。早いもので次が音楽会最後の曲です。皆さんにここでプレゼントがあります。これは何でしょう? そうです。カスタネットです。それでは最後にこのカスタネットと一緒に演奏しましょう。 ※3
11	フィナーレ	《ピクニック》	今日はありがとうございました。春の音楽をたくさん演奏したから公園とか野原に行きたくなってしまいました。もうすぐ桜の花が咲くからお弁当を作ってピクニックに行きたいな。

※1 楽器説明については前述のため省略

※2 ウッドブロックを子ども達の中で叩きながら演奏した

※3 手作りのカスタネットを配布

表9に示されているように、プログラム上は一見関連性のない作品が「語りかけ」によって結びつき、音楽会全体が物語のような構成になっている。その物語には季節を味わうためのキーワードである「動植物の目覚め」「開花」「つくし、菜の花など春の山菜」などを盛り込んだ。幼児を対象とした演奏会では音楽への導入、つまり音楽に興味を持たせることが大切である。

「語りかけ」は、その手助けとして大変重要な要素であるといえる。

例えば、L. アンダーソン《シンコペーテッド・クロック》は、シンコペーションのリズムが面白く、ウッドブロックなど打楽器が活躍する曲であるが、「森の中の目覚まし時計」の語りかけをしてから、ベルの鳴る目覚まし時計を実際に用いて春の目覚めを表現した。子どもたちは、リズムを楽しむと同時に、目覚まし時計におどろきながらも起きる真似をして背伸びをする子どもの姿などが見られた。

(2) 「語りかけ」で生まれる共感

幼児を対象とした演奏会では、「語りかけ」が演奏においてだけでなく、演奏者と子どもたちの「共感」を生み出すという意味で大変重要であるといえる。例えば石井（2003）は、乳幼児期の音楽表現に重要なものとして以下の3つを挙げている。¹⁴⁾

- ① 音楽で表現できるもの「音楽は、言葉では言い尽くせない印象や雰囲気、感情などを表現することができる」
- ② 作曲者・演奏者・聴衆の間の「共感」
- ③ 表現テクニック

「音楽表現とは作曲者と演奏者、聴衆とによって成り立って」おり、「乳幼児にとっては、このような区別はもちろん存在しない」が、「他者と共感するということが『快』を感じる経験」となり、「子どもたちは自らの表現について肯定感をもつことができ、安心して表現活動を拡大していくことができるようになる」。¹⁵⁾これに加え本公演のようなアンサンブルの形態では、演奏者同士にも「共感」が欠かせないものである。演奏者は本番に向けて話し合いや練習を重ねて信頼関係を築き、公演ではお互いの音を聴きあいながら一つの音楽を作り上げる。この過程を経て作りだされた息の合った演奏は、子どもたちが「共感」の手本を見る機会ともいえるのではないだろうか。

そして「語りかけ」によって子どもたちの反応を読み取り、演奏者が子どもたちに「共感」しながら音楽会を進行することも大切である。子どもたちの応答によって演奏者は話す内容が異なってくるため、臨機応変な態度が求められるだろう。しかし、「語りかけ」が一方的なものではなく、相互的な「対話」になり、演奏者と子どもたちの温かなコミュニケーションを生み出すことができれば、子どもたちの表現意欲をより高めることができるであろう。

6. まとめ

本論を通して『おやこ音楽会』の開催内容をもとに、幼児を対象とした演奏会プログラムに関する考察を行った。3つの視点からの分析をまとめると、1) 選曲・構成では、季節毎のテーマをもとに、音楽ジャンルに偏らない曲目でプログラムを作成し、2) 既存曲の新たな聴かせ方では、想像力を膨らませるような音の挿入や、作品に物語性を持たせる工夫をすることで、子どもたちに表現する楽しさや面白さを伝え、音や音楽に耳を傾ける方法を提案した。また、3) 語りかけでは、音楽への導入、音楽に興味を持たせる手助けとしての重要性を述べるとともに、子どもたちとの「共感」を通して、「語りかけ」が「対話」というコミュニケーション

になる可能性を示唆した。子どもたちは個性豊かで各々に反応が異なるが、音に集中する瞬間があり、音の変化に好反応を示したといえる。

幼児を対象とした演奏会プログラムには様々な工夫が必要であり、演奏者にはその場その場の柔軟な対応が求められるだろう。今後も幼児と音楽の関わりを探究しながら、実践的な方法で検証を行いたい。研究課題としては、幼稚園での訪問演奏会とコンサート会場での音楽会の比較検討や、年齢の違いによる反響の分析、また様々な楽器編成による演奏プログラムについて検証していきたいと考えている。

【謝辞】

本研究にあたり、田邊武士氏と林美春氏に専門的知見の提供と貴重な示唆を頂きました。心より感謝いたします。

脚注

- 1) ホームページ<http://www.kodomogeijutsu.com/> (2015年9月17日最終アクセス)
- 2) ホームページ<http://www.jafra.or.jp/> (2015年9月17日最終アクセス)
- 3) 例えば、各交響楽団によるファミリー・コンサート(日本フィルハーモニー交響楽団「夏休みコンサート」、なごや子どもの為の巡回劇場「名フィルがやってきた!」など)や名古屋市文化振興事業団「ぶんしん0・1・2」などが挙げられる。
- 4) 『文化芸術による子どもの育成事業』ホームページにも、『小学校・中学校等において一流の文化芸術団体による実演芸術の公演を行い…』と記載されている。
- 5) 幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「表現」の内容を参照。
- 6) “Teatro Musicale/音楽の劇場”代表
- 7) “フルリン打”メンバー、幸田ジュニアユースウィンドオーケストラ打楽器講師
- 8) 2015年秋のおやこ音楽会(9月6日・3回公演)を開催、2015年冬のおやこ音楽会(12月5、6日・6回公演)を開催予定である。
- 9) 毎回チラシに掲載しているキャッチフレーズ。
- 10) ホームページ<http://www.ririta.com/> (2015年9月17日最終アクセス)
- 11) 豊田ほか 2014: 59。
- 12) 同上。
- 13) 2014年夏・秋・冬の公演では、イラストレーターのみすぎ氏に舞台美術を依頼した。
- 14) 石井 2009: 14-15。
- 15) 同上: 15。

参考文献

- 石井玲子編著 2009『実践しながら学ぶ子どもの表現』大阪: 保育出版社。
- 小川容子・今川恭子 2008『音楽する子どもをつかまえない—実験研究者とフィールドワーカーの対話』岡山: ふくろう書店。
- 澤田まゆみ 2006「幼児期における五感と想像力を育てるための考察とその実践—クラシック・ピアノ演奏による幼児教育の可能性—」『新島学園短期大学紀要』第26号: 101-112。
- 財団法人地域創造 2003『地域創造』(春)第14号。
- 白石昌子 2006「乳幼児の発達と音楽の関係」『福島大学人間発達文化学論集』第3号: 13-24。

戸川見子 2013 「クラシック音楽の生演奏が未就学児にあたえる影響についての一考察」『神戸常磐大学紀要』第6号：35-47。

豊田典子・豊田秀雄・荒川恵子・岡林典子・内田博世 2014 「科学的内容を導入した幼稚園訪問演奏会の実践報告—天体と音の物理的側面に着目して—」『大阪人間科学大学紀要』第13号：57-73。

Abstract

The purpose of this study was to examine the concert program for infants based on the approach of “The Parents and Children Concert,” which I have hosted each season since the summer of 2014. In the concert, musical works of various genres including classical and nursery rhymes or children’s songs were performed using the bassoon, piano and percussion. For the performance, we incorporated imaginary sounds into the existing works and produced a new allure for the children by creating stories for the music. In the concert, we were able to observe how some children reacted strongly to the difference in sounds as well as their response to our talk and the impact of the music upon them. Through this analysis, I would like to examine concert programs targeting infants.

